

社会的欲望について

— A・ヘラー『マルクスの欲望理論』の検討を中心にして —

松 原 智 雄*

On Social Need — A study of A. Heller's "The theory of need in Marx" —

Tomoo MATSUBARA

要 旨

従来、必ずしも明確化されていない社会的欲望の概念を、マルクスのテキストクリティークを通じて確定しようとするヘラー女史の労作『マルクスの欲望理論』の検討を通して明らかにしようとする。

1. は じ め に

全ゆる社会において労働の生産物は直接、間接に人間の欲望を充足するものでなければ生産物の意味をなさないことは自明のことであろう。ただし、生産物とは単なる自然対象とは違って、人間に役立つものを指すからである。それゆえ、消費と連関して欲望は生産に対して、その前提となり結果となってあらわれるものといつてよいであろう¹⁾。しかし、資本主義社会の解剖学たる経済学的分析にとって欲望は、財貨など同様にただちに解明されるべき課題（概念）をなすものではないことはいくまでもない。むしろ、価値形態の廻り道を必然的なものとする資本主義社会に特有な形態規定性を明確にしてはじめて解明しうるものだと考えられる。

勿論、人間の欲望は物的生産物にとどまらず、種々の対象を前提にし、又、その結果として成立しうるものであって、その意味では経済学にとどまらず、様々な角度、分野から分析されなければならないものなのであろうが、「飲み、かつ食う人間」として、自然との絶えざる「物質代謝過程」を社会存立の根本とする人間（社会）としては、その根本的規定は、経済学で解明しうるし、又、解明されねばならない。一般的にいえば、経済学では消費と生産の関連において、したがって需要と供給という形においてあらわれるといつてよいが、この分野に関しては近代経済学の得意の分野

とするところであって、従来、正統的マルクス主義経済学においては、需要としてあらわれる人間の欲望（商品所有者の欲望というほうがより正確であるが）が生産に対して一つの条件となっている点が殆んど無視されてきた。しかし、ここでとりあげるハンガリーの女性哲学者、アグネス・ヘラーの『マルクスの欲望理論』⁽²⁾は、概して通説的な立場に立ちながらも、マルクスの欲望概念の変遷のテキスト・クリティークを通して、いくつかの点で従来のマルクス主義者では不明であった論点に立入って検討のメスを加えており、彼女のそれらの論点を紹介し、又再検討することは、この問題が従来必ずしも充分解明されてこなかっただけに一定程度、意義あることではないか、と考え本稿で取り上げることにした。彼女の立論は、マルクスにほぼ忠実にしたがった経済学的把握を基礎に、哲学的概念を駆使して構成されている。そして、その根本的欠陥は、行論でも示す通り、資本主義の特殊な機構の解明が欠けていることである。その点を明らかにすれば、経済学的に欲望がいかに処理されるかは自ずと明白となるだろう。資本主義も一社会として自立しうるものである限り、人間の欲望を、その特殊な形態機構を通してではあるが、包摂し充足しうるものでなければ存立しえないことは自明である。正統的マルクス主義哲学及至経済学ではこの点明確ではない。ヘラーも又、こうした欠点を免がれてはいない。

とまれ、以上の問題点を念頭において、以下で検討を加えていきたいと考えるが、その前に、ヘラーの著作の構成と本稿で主としてとりあげるべ

*助教授 一般教科

きヘラーの論点を簡単に記しておこう。

ヘラーの著作は第一章マルクス欲望概念の予備的考察、第二章欲望の一般的哲学的概念と欲望の疎外、第三章「社会的欲望」の概念、第四章「ラディカルな欲望」、第五章「欲望の体系」と「連合生産者社会」、という構成となっている。第一章でのマルクスの種々の著作にみられる欲望概念の整理検討を通して、第二章の欲望そのものの概念化にいたる。そして、本来の欲望ともいべきそれらの欲望と、資本主義の下での疎外された状況の対比。第三章は、第二章の補足ともいべき部分であるが、本来個人的、主体的な欲望が「社会的欲望」として客体化される点を種々論じている。第四～五章は資本主義の内的法則の展開による資本主義と相容れない欲望（ラディカルな欲望）の成立と、それを実現した新しい社会像（「連合生産者社会」）とその下での「欲望の体系」が示される。

大体、以上がヘラーの著作の概観であるが、ルカーチの下で学んだといわれる⁽³⁾ヘラーの著作は経済学というよりもむしろ主体性論、疎外論の哲学書といったほうがよいであろう。しかし、第一～第三章までのマルクスのテキストクリティークや、その概念化の基礎は多くの場合、経済学にもとづいており、それゆえ我々はこの前半三章を中心に考察すれば、それらを前提にした第四～五章のヘラーの積極的主張にも、基本的部分については議論がつくされ则认为する。したがって、2で第一章を、3で第二章を、4で第三章を取り上げ、5で第四～五章を検討し、結びとした⁽⁴⁾。

2

A.

ヘラーは古典派経済学と対比した場合、マルクスの経済学的貢献が①労働ではなく労働力の売買を明らかにしたこと②利潤、利子とは区別される剰余価値の発見③使用価値の意義の明確化、という三点にあると述べている。(p. 23 参照)そしてこの三点にわたるマルクスの経済学的貢献はそれぞれ直接、間接に「欲望」と関連しており、マルクスの経済学におけるこれらの貢献の重要性からみても、これらに関連する欲望の意義の重要性が明らかになる、とヘラーは述べる。

古典派経済学においても、通説的マルクス主義経済学においても、生産物は自動的に人間の欲望をみたすことが自明の前提となされている以上、特に『資本論』で明確に規定されたマルクスの経

済学的な諸貢献が多かれ少なかれ、その背後に人間の欲望を前提とし、又、結果としている、という点を改めて指摘することは、それ自体として意味はあろう。

「商品は、……その属性によって人間のなんらかの種類の欲望を満足させる物である」(『資』① 71 頁)とマルクスが述べているように、使用価値は直接欲望とその充足という関連を通して結びついている。交換価値をもたない使用価値はあっても使用価値をもたない交換価値はない。このように使用価値の第一義的重要性は明白であり、それは直接、欲望と関連している。しかし、ヘラーによれば、マルクスは「いかなる場合も〈欲望〉という言葉から理解されうるものについてなにも述べていない」(p. 23)のであり、むしろ欲望の考察を「意識的に見過ごしている」(p. 25)。この点に重要な経済的意義が含まれているのであるが、ヘラーはこの点を指摘しながら、それ以上にここでは立入った検討を加えず、進んで労働力の売買、剰余価値と欲望の関係を述べる。

ヘラーは労働力の売手たる労働者が労働力の売買の代価＝賃金によって労働者の生存欲望を充足すると同時に、その売買が資本家の「資本評価」⁽⁵⁾欲望と剰余価値の生産欲望を充たすものとする。そしてこの剰余価値に対する欲望については「剰余価値を生産する可能性は、ある社会がそれ自体の〈生存欲望〉を満足させるのに充分な以上に生産する能力をもったとき生じるものだ」(p. 24)としつつ、具体的には剰余価値の生産が資本主義社会では資本の欲望であるように、「剰余価値の生産はいかなる状況でも生じるのではない」(p. 25)として、それが「私的所有と分業」を前提とし結果とするものであるとする。それ故、ヘラーにあっては階級関係が剰余生産の基礎ということにならざるをえない。つまり、支配階級の搾取の欲望を前提とするということにならざるをえない。勿論、このようなヘラーの解釈は正しいものではない。剰余労働は他の生物と区別される人間の特性の一つであり、人間社会発展の物的基礎であり、単なる階級関係の、しかも搾取欲望の産物とする訳にはいかない。

以上のように、ヘラーはマルクスの経済学的貢献と欲望の関連を述べているが、その意味するところはなにか。ヘラーは結論的に古典派と比較している。

ヘラーによれば、古典派経済学にあっては欲望はなんらかの働きを示さなかった訳ではない。む

しろ「反対にそれは決定的概念であったとさえいいうる⁽⁶⁾」(p. 25)。その場合、「欲望の評価は資本主義の観点から展開されている。その故、それらは純粋に経済的なものである」(同)、しかし、「マルクスによれば経済的欲望への欲望概念の還元は諸欲望の(資本主義的な)疎外の表明」(同)なのである、といい⁽⁷⁾、資本主義社会のように「生産目的が欲望の充足にではなく、資本の評価にある社会においては、諸欲望の体系は分業によって成立し、欲望は市場においてのみ有効需要の形であらわれる」(p. 26)とヘラーは述べる。

ここでヘラーが評価しているマルクスの論点は次のようになる。つまり、使用価値が全ゆる社会に共通なようになんらかの欲望を満たすものとしてありながら、資本主義社会にあっても、あらゆる欲望が経済的形態をとってあらわれざるをえない、という点を明らかにしたということであろう。資本が資本の価値増殖(ヘラーによれば「価値評価」)を欲し、労働者が生存のみを求めざるをえなくなる、というかたちで基本的にはあらわれる、とするのである。

たしかにヘラーの述べる通り、資本主義社会では欲望は「有効需要」という形をとらざるをえないし、それを「疎外」と呼んでもよいであろう。しかし、なにゆえに、そうした「疎外」が成立するのかを解明することがまず第一に必要であろうし、そのことを通してしか、人間の一社会としての資本主義が「本来の人間の欲望」を充足しているのか否かを判断することは出来ない。

「使用価値は、たとえ社会的欲望の対象であり、したがってまた社会的関連のなかにあるとはいえ、どのような社会的生産関係をも表現するものではない」(『全集』⑬, 14頁)。したがって、「経済的形態規定にたいしてこのように無関係な場合の使用価値は、すなわち、使用価値としての使用価値は、経済学の考察範囲外にある」(同)とマルクスは述べているが、欲望に直接関連する使用価値が経済学的考察から全て捨象される訳ではない。「使用価値は同時に交換価値の素材的な担い手になっている」(『資』① 73頁)限りは当然、特殊な形態規定の内に考察されねばならない。この場合、商品所有者にとって自己の商品の使用価値は直接欲望の対象ではない。「他人のための使用価値」である。だからこの意味では必ずしも「使用価値は直接欲望の見地から定義される」(p. 223)というヘラーの言葉はあてはまらない。このため、ヘラーにあっても、直接欲望の対象となる

使用価値と有効需要としてあらわれる社会的欲望との異相関係が内的関連をもって説明することが出来なくなり、その関係を単に「疎外」と表現するにとどまる⁽⁸⁾。

このようにヘラーは資本主義の機構の形態的特殊性のうちに現われる社会的欲望を単に疎外という表現で事実的に指摘するのみであり、その内的な解明には至っていない。こうした、いわば基礎的作業を欠如して、ヘラーは直ちに別個の視点を提起していくことになる。つまり、ヘラーによれば、マルクスの経済学には欲望が「背後にかくれてはいるが根本的な役割を果たしている」(p. 27)ものとしてあり、その背後にかくれた欲望はむしろ「非経済学概念……つまり歴史的哲学的概念として、……人間学的な価値概念」(同)として考察すべきだとするのである。

資本主義の下での、物化された、有効需要として表われる欲望を疎外されたものとし、本来の「人間学的な価値概念」としての疎外されない欲望を検出しようとするヘラーの考えの根底には、資本主義においては欲望が必ずしも充足されてはいない、という前提がある。しかし、少なくとも資本主義社会にあっても、なんらかの仕方で人間の欲望を充足せずには一社会として自立的存在を主張しえない。むしろ資本主義は市場価値という社会的欲望充足の特殊機構を有しているのであり、そのメカニズムは巧妙である⁽⁹⁾。

とまれ、ヘラーは第一章で資本主義的に疎外された有効需要としての欲望と、その背後にかくれた本来的な欲望の存在を指摘して次に移る。

B.

先にも見たように、ヘラーによればマルクスの欲望概念は本来的には哲学的、人間論的なものであるが、そのマルクスにあっても、欲望概念は必ずしも整理されていない。経済学的なものや、フィエルバッハに依拠した自然主義な欲望概念が複雑に入り混じり、統一的に理解することが甚だ困難である、という。しかし、ヘラーはそれらを次のいくつかの分類型に整理している。

①「物的欲望」と「精神的欲望」

「欲望のタイプはそれらが向けられている対象やその対象を包摂する活動と一体となって形成される」(p. 28)ものであるならば、このような欲望と対象との関連の中で類型化されるのは、物的財に対するものと、精神的財に対する欲望とならざるをえない。

②「自然的欲望」と「社会的に生み出された欲望」

欲望を「歴史的、哲学的、人間的」に分類すれば、「自然的欲望」と「社会的に生み出された欲望」とに分類される。前者は、「肉体的欲望」または「必然的欲望」と同義であり、後者は「社会的欲望」と同義である。(cf, p. 29)

「肉体的欲望」とは生物学的欲望と一致するが単なる自然主義的(生物学的)意味でマルクスはそう述べているのではない、とヘラーは主張する。資本主義では人間の欲望が生物的欲望(生存限界)にまでおとし入れられているという事態を指して、こうした表現をとっている、とする。つまり資本主義による人間の物化の表現としてである。この物化された人間欲望は本来の歴史的・哲学的な欲望と対立するものであるが、マルクスの学説発展過程から見れば、初期マルクスのいわば自然主義的傾向の強い欲望概念が、後期の成熟した著作のなかで社会的意義の観点から把え返され、深化していく方向が見られる、とヘラーは述べている。

そこで、ヘラーはこの「自然的欲望」の概念の変化を検討していく。ヘラーによれば、マルクスの『経済学批判要綱』、『資本論』を通して、自然的欲望は一貫して用いられてはいるが、その場合、それは「人間生活(自己保存)の単純な維持と関連し、〈自然的に必要なもの〉である。なぜならそれらの充足なしには人々は単なる自然的存在として自己を保存出来ないという簡単な理由から」(p. 31)用いられているにすぎない。したがって、それは動物の本能的な生命維持とは自ずと別のものであり、その意味で本来社会的なものである。この点、初期と後期ではマルクスの用語法は異なる、とする。この自然的欲望は『資本論』では労働力の価値規定に関連してあらわれている。「食物や衣服や採暖や住居などのような自然的な欲望そのものは、一国の気象その他の自然的な特色によって違っている。他方、いわゆる必要欲望の範囲もその充足の仕方でもそれ自身一つの歴史的な産物であり、したがって、だいたいにおいて一国の文化段階によって定まるものであり、ことにまた、主として、自由な労働者の階級がどのような条件のもとで、したがってどのような習性や生活要求をもって形成されたか、によって定まるものである」(『資』① 300 頁)⁽¹⁰⁾。このように自然的欲望は文字通りの自然的生物的なものではなく、元来、歴史的、社会的に形成されたもの、即ち生活水準のことである。けれどもこれらが本当の意味で社会

的なものとなるのは、資本主義になってからである。とヘラーは述べる。つまり、資本主義における、工業生産、産業の発展が旧来の共同体関係につきまとう自然的限界をとり払い、「人々は最早、単に自らの胃袋と子供の胃袋を満たすためにだけや、赤裸な死から自身と家族を守るためにだけ働くのではない」(p. 32)ようになる。「工業生産の発展は〈自然的欲望〉を完全に充たす機会を与えるのみならず、可能ならば、永久にその問題(矛盾)を除いてしまう」(同)からである。このように考えれば『経哲草稿』にいうところの自然主義的欲望概念はヘラーにとっても一面的なものであり、否定されるべきものとなるように考えられるのであるが、ヘラーはそう考えていない。『経哲草稿』には、厳密に言えば資本主義社会が〈肉体的欲望〉への還元を遂行し、いいかえれば〈自然欲望〉のグループを作り上げるという深遠な洞察を含んでいる」(p. 32)のであって、このような資本主義の現実と、他方での物的生産力の発展にもとづく、本来の「自然的欲望」の自然的克服の可能性との矛盾こそが、重要だとするのである。

かくして、ヘラーは「自然的欲望」とは「一つの欲望のグループではなく、限界概念である。その限界とはそれを超えては人間生活がもはや人間生活としては再生産されないものであり、それをこえては単なる生存の限度も通り越してしまうもののなのである。」(p. 32)と述べ、自然的欲望を概念としては承認しがたい、とする。それは「諸欲望の充足のための生存的限界」(同)とでもいうべき必要最低限の人間の生存に関わる事柄なのである、と述べる。

こうしてマルクスに一貫してあった「自然的欲望」概念の変化とその限界を示したヘラーは、「必然的欲望」について触れる。この概念は『経済学批判要綱』では「自然的欲望」と同一視されていたが、『資本論』になると、先の引用個所のように、これは「歴史的に展開し、単なる生存によって支配されるものではない。これらの欲望の中の文化的要素、道徳的要素や習慣は決定的である」(p. 33)とされている。しかし、マルクスの労働力の価値規定に関連して展開された「必然的欲望」もその重要性にもかかわらず、矢張り不明確である、とヘラーは述べる。「当時のイギリス労働者の〈必然的欲望〉についてマルクスが語るとき、彼はこれによってたんに物的欲望のみではなく平均〈average〉概念の中で説明されるべき非物質的な欲望をいみしていた」(p. 33)とし、しかも、

それらの「〈非物質的欲望〉」の中には、平均化されず、貨幣で購うことも出来ないような、全く個人的な欲望も含まれている(同)場合すらある、とヘラーは述べる。このような「必然的欲望」の不明確さは、マルクスが経験的にこれらを説明したからであり、「哲学的に考案」すれば次のようになるとヘラーは主張する。つまり、「物的生産の領域は、……必然の領域である。このいみでは〈必然的欲望〉は物的生産から常に成長するところの欲望である」(p. 34) この物的生産の段階―分業の一定段階―に応じて、「ある社会ないし階級のメンバーが自分たちの生活(分業の一定段階における)を〈普通のもの〉であるという感覚や確信をもつ」(p. 33) のであり、そのような「感覚や確信をもつ」にたる欲望の充足こそが「必然的欲望」である、と。これに対して、全国民に関わる諸欲望「精神的・道徳的欲望」は分業にもとづく物的生産、したがってまた階級関係に関わるものではなく、全く個人的で平均化されず、又、貨幣で購買できるものではない。それ故、これらはいわば「自由な欲望」といえる。

このように、ヘラーによれば「欲望の体系」は「諸欲望の充足のための生存的限界」とされたいわゆる「自然的欲望」を基礎に、物的生産にもとづく「必然的欲望」、それ以外の精神的・道徳的な「自由な欲望」に分類される。これは、生命体としての人間を基底において、所謂「必然の領域」を「自由の領域」に対応した欲望の体系化であり、社会主義社会にも必然的に継承されるべきものであった¹¹⁾。

以上のような整理をマルクスのテキストクリティークを通して行なったヘラーは経済学的欲望について簡単にふれ、又欲望そのものを規定している。これは「欲望の体系」化の補論をなしている。

ヘラーによればマルクスの経済学研究の展開につれ、「必要的欲望」⁽¹²⁾と「ぜいたくな欲望」という経済学的な欲望概念が出てきている。しかし、この概念は経済学的に厳密なものではなく、結局のところ『資本論』第二巻で示唆されているように「ぜいたく」か否かは「その対象物が人口の大多数かあるいは少数者によって所有され、使用されるかどうかの問題によって決定される」(p. 37) しかない。つまり、社会の階級構造によって、「ぜいたく」か否かが決められるのであって、物質自体にぜいたく品とそうでないものとの区別がある訳ではない、とする。かつて、ぜいたく品であっ

たものが必需品となることはいくらかでもあるのであり、こうしたものに対する欲望を固定するのは誤りである、とヘラーは述べる。ヘラーにすれば「必然的欲望」の範囲に含められて展開されるべき一系論にすぎないのであろう。

このようにマルクスの欲望概念の変遷を以上のように分類化してきたヘラーは、問題はこのような欲望の類型化にあるのではなく、その根底にあるものである、とする。つまり、「マルクスにとって〈人間的富〉という前提条件は個人の自由で多面的な活動性の唯一の基礎である。価値概念としての欲望とはこのような富のための欲望以外のなものでもない」(p. 38) とのべ、「価値概念としての欲望」を提起する。それは「人間的富」として、「人間の全能力、感性の自由な発展や全ゆる個人の自由で多面的な活動性の唯一の基礎」となるべきものである。いいかえれば、「国民経済学的な富と貧困とにかかわって、ゆたかな人間とゆたかな人間的欲望とが現われること」であり、「人間的な生命発現の総体を必要としている人間」即ち「ゆたかな人間」(『経哲草稿』144頁)が社会主義社会の人間である。

3

A.

ヘラーによれば、欲望とその対象は互いに関連した、いわば表裏一体のものである。しかし、動態的な一つの社会構成体をとってみれば、その社会では生産が決定的な要素となっており、したがって生産が新しい欲望を創り出すといえる。しかし、「生産は、又既に現存するところの欲望と相關している。つまり、〈物的生活の様々な形成は、勿論、既に展開された欲望にもとづいており、これらの欲望の生産は、その充足と同様、歴史的過程である〉(『ドイツイデオロギー』)」と、ヘラーはマルクスに拠って述べている。このように欲望と対象の関係は社会的にはまず第一に生産と欲望の相關関係としてあらわれる、とする。

だが、勿論、欲望の対象は物的財のみに限られる訳ではない。「その対象とする世界は全体的な世界である」(p. 40)。そして、「人間の欲望の最高目的は他者である。いいかえれば人間が他者に対する欲望の最高の目的になる度合が、人間の欲望の人間化のレベルを決定する」(p. 41)とヘラーは述べる。ヘラーによれば、欲望はその対象と範囲を全ゆる物的対象のみならず、最終的、最高のもの

として人間をその対象とするものである。欲望と対象が関連し、その対象には物的財のみならず人間をも含むものとするならば、欲望とは本来、人間そのものと規定されることになる。

人間の欲望は元來動物の自然発生的なそれとは異なっている。つまりその対象を自然に、つまり単なる物に限定されたのではなく、むしろその対象を拡大し、創造しうることによる本質がある⁽¹³⁾。この中にはその欲望と対象との間を様々な形で媒介するもの、労働手段や、それ以外の充足手段をも人間が創造しうることが含まれている。それ故、人間にとって欲望が本来的であるという視点から、『ドイツイデオロギー』では、「最初の歴史的行為はこれらの欲望の充足のための諸手段の産出……である」(『全集』③ 24 頁)と述べられている、とヘラーはいう。つまり、「人間の起源の歴史は、根本的に彼の欲望の始源の歴史でもある」(p. 41)とするのである。このように、欲望というものが対象と相関し、対象をわがものとする過程を必然的なものとしているのであるとすれば、「欲望は同時にパッションであり能力である(対象をわがものとするパッションであり、能力である)。このように欲望はそれ自身能力である。対象化する活動への能力はこのように人間の最大の欲望の一つである」(p. 41～2)とヘラーは述べる。

対象との関係において、ヘラーのように欲望を哲学的に一般化して規定することの当否はさておき、ここでの規定がマルクスの労働過程論と深く関わっていることに注目しておきたい。注⑬でのエンゲルスの言にあるように、歴史においては「意識的な意図なしには、意欲された目標なしにはなにとも起こらない」のであって、そのことはなんら不思議なことではない。労働主体による対象獲得の、又同時に主体の対象化である過程としての労働生産過程は「意識された意図なしには、意欲された目的なしには何事も起こらない」。勿論、それだけでも不充分であり、実際に労働しなければならない。この労働に人間の特質が集約的にあらわれる。「最悪の建築師でさえ最良の蜜蜂にまざっているというのは、建築師は密房を蠟で築く前に、すでに頭の中で築いているからである。労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心像のなかには存在していた、つまり観念的にはすでに存在していた結果が出てくるのである。」(『資』① 312 頁)ヘラーの欲望概念はこのような労働主体の意識性、意欲と深い関わりをもって規定されている、といえよう⁽¹⁴⁾。だから、「対象的活動に対する能力は人間

の最大の欲望の一つである(この哲学的概念はまさに根底である、そしてそれゆえ、マルクスにおける労働の〈生き生きとした欲望〉への発展という概念の中での決定的な要素である」(p. 42)とヘラーは述べる。勿論、ヘラーにあっては、欲望概念はこの労働過程論に関してのみならず、それ以外の全ゆる対象についても妥当するように哲学的一般的に語られているのであるが、元來、本質的な人間に関する概念としての労働が動物とは異なっており人間と自然との物質代謝過程での独自の人間性を表わすものとして定義されようとするならば、まさにこの点において、ヘラーのいう欲望概念も根本的には規定されなければならないであろう。それは勿論、単なる欲望一般としてではなく、社会的欲望としての規定でなければならない。「まさに根底」として、ヘラーのいう〈物的〉欲望は生産によって制限され、他方その他の欲望はもっとも多様で異質な〈対象〉によって制限される」(p. 44)のである。勿論、ヘラーのいう通り、労働が「根底」なのであり、そうだとすれば、「その他の欲望」も基本的には、この労働との関係を通してしか規定しえないのである。

このようにヘラーの「一般的、哲学的概念」としての「欲望」は人間の主体性、つまり意識性、意図性とは関わる形で労働生産過程と深く関わりあって規定されている、とみるべきであろう。この観点の深化は後に立入って見ることになる。

B.

ヘラーは資本主義的な欲望の疎外を明らかにするため、疎外されない本来の人間として「豊かな欲望をもつ人間」を想定する。これは前のAで触れた欲望が「対象化すること自体のうちに創り出されるところの、質的に異なる種類の諸対象に向けられる需要としての欲望」(p. 42)と規定されたことを受けたものであるが、「その概念的構成が普遍的であり、意識的であり、社会的実存であり、対象的実存と自由であるところの人間の本性(人間的富)は人間が自分らを〈類〉のレベルにまで止揚する時、Dynamisの特徴を完成する」(pp. 45～6)といわれている。この完成に至る過程が欲望疎外の具体的展開過程となる。

しかし、ヘラーによれば「疎外は人類や人間の本質のなにかある種の長期的な歪曲といったものではない。人間の本質は疎外それ自身の中で展開し、このことが〈豊かな欲望をもつ人間〉の認識の可能性を創り上げる」(p. 46)とされ、それゆえ、

疎外が最高限度にまで展開した資本主義における欲望の疎外を分析することが、「豊かな欲望」の意味する具体的内容を明らかにする手掛りとなる、というのである。とすれば、「疎外」という判断そのものの当否が問題とならざるをえないと思われるのであるが、それは問わないことにしよう。

ヘラーによれば、資本主義社会においては自然科学の発展によって物的生産力は高められ、豊かになり、又、新たな欲望や能力を生み出すことになる。他方、「商品関係の一般化によって、それは貨幣を社会的富の量的〈化身〉に転化させる。欲望はもはやその質にしたがい〈自然的〉分業の基礎上で割りあてられるものではなくなる。つまり、社会のいかなる構成員も、欲望、即ちいかなる質的なものの充足から原則的に排除される(人々は単に彼の欲望の対象を買わなければならないだけである。)」(p. 47)と述べる。物的生産の拡大と、貨幣による購買の量化、これが自然的共同体にもとづく資本主義に先行せる諸社会に対する資本主義の特徴である、とする。ただし、それらの諸先行社会にあっては、個々の共同体員は貧弱ながらも分業に応じた質的欲望を充足しつつ、類的には生産力の狭隘さを有し、資本主義はその逆となる、と。しかし、この資本主義の物的生産力の拡大も無限のものではなく、資本自体によって制限されている。ヘラーはそれを「利潤率低下法則」「周期的恐慌」に求めている。この場合には、資本家、労働者ともに「貧困」(後者にとっては字義通りの)が生じるといっているのである。

ヘラーが述べる資本主義の特徴と矛盾は大きくみて以上のようなものであるが、ここでも資本主義の形態の特徴が無視されているように思われる。「質的な」「欲望」の充足から完全に占め出され、貨幣欲望のみが一人歩きするかの如き議論は、私的所有と分業を基礎にして類と個の対立において人間論を提起した『経済学、哲学草稿』当時のマルクス貨幣論をそのまま引きついだもの、といわざるをえない。この場合、いわば商品経済の価値的側面のみが一面的に強調されて、使用価値が消極的にはあれ、価値をチェックする側面が完全に無視されている。このような貨幣物神の一面の強調は、Aでも見たような労働過程論と深く関わりをもって規定されていた欲望概念と決して無縁ではない。『資本論』では労働過程は使用価値を作る過程として一面的に規定されていたが、このことがヘラーの欲望論の根拠となっている。つまり、労働過程を使用価値の生産に一面化すると労働主体の

個人的な使用価値の獲得過程と理解されるからである。労働過程は労働主体の労働対象への働きかけの、いわば主体的側面の明らかにする。それは使用価値を直接目ざしていることはいうまでもない。しかし、労働の過程は、他面で技術的生産力を基礎にして生産物の社会的配分をも予定した労働生産過程の基礎的面であって、生産物の生産に必要な直接的労働や生産手段の基本的関係をも内包している。この過程はいうまでもなく社会的物質代謝の過程である。「人間は文字通りの意味で社会的動物である。たんに社会的な動物であるばかりでなく、社会のなかだけで自己を個別化することのできる動物である」(『要綱』①6頁)。だから「十八世紀流のロビンソン物語」(同上書5頁)は「市民社会」の「錯覚」なのである。労働過程の主体性は労働生産過程における、生産関係に社会的に規制されねばならない主体性である。自由なる諸個人の個人的に自由勝手な主体性など労働生産過程を前提とする限りありえない。ヘラーの述べる本来の欲望が労働過程における使用価値の領有の側面に深く関わっているとするならば資本主義における貨幣物神は全くその対極をなす訳である。アダム・スミスの「労働＝本源的購買貨幣論」のいわば裏返しの規定になっているのである⁽¹⁵⁾。

この資本主義の貨幣関係、商品関係の一般化を前提にして、いくつかの疎外例をヘラーがあげている。以下に紹介しよう。

①目的と手段の転倒

「全ゆる社会で労働は二重の性格をもつ。それは抽象的労働であり具体的労働である。具体的労働は人間の欲望を充足することである。この労働の遂行は、即ち作業はそれ自身手段である。疎外では(殊に資本主義のそれでは)労働に内在する目的—手段関係が逆転して、この対立物となる。商品生産社会では、使用価値(具体的労働の成果)は欲望を充たす役には立たない。その性質は、反対に、それが属さない人々の欲望の充足に向けられる。労働者が作り出す使用価値の性質は彼にはどうでもよい。彼はそれにはなんらの関心ももたない。彼が自己の欲望を充足するために遂行するのは抽象的労働である」(p. 48)と述べる。ここでも先にみたように、ヘラーは自己労働にもとづく領有を本来的としている点がうかがわれる。その上で、商品経済に必然的な「他人のための使用価値」と対比しているのであるが、個々の生産者の自己労働にもとづく領有というのは市民社会の「錯覚」であろう。その意味では先の貨幣欲望と

同じく、余りにも商品経済的現実を目を奪われた考察でしかないのである。しかし、ヘラーは「労働の二重性」を全ゆる社会に共通なものと考えている点で、従来のマルクス主義経済学の通説を越えている。しかし、その抽象的労働とは「労働の抽象的労働への還元（労働者が参加している労働や活動の生産物に関連して、彼の作業の特殊な質が労働者にとって無関心になること）……」（p. 53）と述べたり、又、「純粹に社会的な社会」でも「目的—手段関係の転倒が行なわれている」としている場合、社会主義社会における高度な機械的生産を指していること（cf. p. 49）などからみて、抽象的労働の意味するところの真意はおおよそ判断がつく。抽象的人間労働とはたしかに機械制大工業による労働の抽象化＝労働者の熟練の技能の止揚＝単純労働化という事態から解明されたものではあったとしても、それにとどまらず労働の社会的配分に関して表われるところの本源的概念に他ならない。それゆえ、目的と手段の転倒、とヘラーが主張してもその意味するところは必ずしも明確ではない。

「マルクスによれば、社会的生産の目的は社会的欲望の充足であるべきである。しかし、資本主義的工業と農業は欲望のための生産をしないし、又、それらの充足に対しても生産はしない。生産の目的は資本の価値評価であって欲望の充足（市場における）はこの目的のための手段にすぎない」（p. 49）とヘラーは述べているが、確かにそれはそうだとすると、こうした資本主義的生産機構の特殊な「廻り道」を通して、社会的需要は充足されるのであり、こうした点を解明してこそ、「目的と手段」の転倒ということの意義も解明される。

以上のべてきた目的と手段の転倒ということから資本主義的欲望も当然転倒したものとなる、とヘラーは述べる。簡単にいえば、ヘラーが述べていることは、資本主義的生産が資本の価値増殖（ヘラーによれば価値評価）にもとづいて行なわれ、一方的、大量的に商品供給がなされる。そして個々人の欲望もそれに応じて型のはまったものに一面化され、あふれるばかりの物質的欲望に一面化される、ということであろう⁽¹⁶⁾。そして、このような物的欲望や一面的欲望にたいし、ヘラーは「自由時間への欲望」「豊かな人間的欲望」を対置する。

② 質の量への還元

資本主義的生産によって欲望が、物的で一面化されたものに疎外されることが第一の規定であったとするなら、第二の疎外は、量的欲望への還元

である。「貨幣・貨幣関係は〈通常〉の質的關係の〈逆転〉である」（p. 52）。マルクスはこの点、早くから気づいていたが、初期と後期とでは幾分違いがみえる、とヘラーは述べる。初期には「貨幣の量がますます貨幣の唯一の力づよい特性となる。貨幣は、すべての存在をその抽象性にまで還元したが、それと同様に自分自身の運動のなかでみずからを量的な存在へと還元する。際限のなさや節度のなさが貨幣の真の尺度となる」（『経哲草稿』50頁）と述べ、マルクスは「はっきりとした否定的価値判断をとまって述べ」（p. 53）ていたとヘラーは主張する。しかし、後期のマルクスは、『『経済学批判要綱』では欲望の量化は（自然的共同体の欲望体系に対して）疎外された展開として表現されている。もっと明確に言えば、疎外されているが、しかし、必然的發展形態とされている」（p. 53～4）とヘラーは述べる。この点を例証するためのヘラーの『経済学批判要綱』からの引用箇所は次の通りである。「もし、貨幣が一般的等価物であり、一般的な購買力であるならば、全ゆるものが購入され、全ゆるものが貨幣に転化しうる。しかし、それが貨幣に転化しうるのは、全ゆるものが疎外されているかぎりでのことである。いわゆる非疎外的な永遠的所有は……かくの如く貨幣がそれらを買うとき粉碎される……全ゆるものが〈現金〉で所有されうる。……このように丁度、全ゆるものが貨幣で疎外されうるように、全ゆるものが又しかしながら貨幣で買われる。それゆえ、全ゆるものが全ゆる人にとってわがものとされうる……⁽¹⁷⁾」。このようにマルクスが貨幣欲望としてあらわれる欲望の量化を歴史的必然的であると後期には評価するに至った、というのはその通りであろう。

③ 欲望の貧困化

貨幣関係によって量化された一面的欲望は全ゆる欲望が所有欲望に還元されることでもある、とヘラーは述べる。「支配階級にとって、この〈所有〉は効果的な所有であり、それは直接私的所有や貨幣に向けられているところの量的に増大する欲望である。労働者の所有欲望は、それとは反対にたんなる生存である」（p. 57）という。この原因はヘラーによれば、分業による「主たる生産力＝人間」の制限にある。資本主義的生産においては、分業によって作業は労働者にとってなんら欲望ではなく「疎外された労働」である。したがって、「労働が生き生きとした欲望」であることが疎外されているので、ただ生存のための所有欲望をもつだけ

になる、とヘラーは述べる。

しかしながら、先にも述べたように、本来人間にとって労働とは人間の本質であるとしても労働それ自身が「生き生きとした欲望」であるかどうかは定かではない。それは極めて合理的な部面ではないのではないだろうか。最小の労働で最大の効果をあげるという経済の原則からしても、合理的・科学的に処理されるべき人間の活動分野であって、感覚的にどう判断すべきものではないように思われる。資本主義的生産においては労働者は単純な労働者として機械に付随している存在になっているが、社会主義社会においても労働生産過程そのものは常に経済性合理性が要請されるべきものとして一層、労働の単純化＝機械化が進むべきものとしなければならない。労働の生産性の上昇が労働時間の短縮をもたらし、社会的需要の充足となってあらわれ、更にそれが「自由可処分時間」の増大となる。人間の自由の範囲が時間という具体性をもって実現される。勿論、その自由時間に必要とされる諸々の物的財等は、剰余部分も含んだ労働時間内で計画的に生産される。先にみたような「労働＝生き生きとした欲望」論は古典派経済学にロビンスン物語が好まれたように、単純商品生産者社会的に一面的に理解された労働過程論にもとづいているように思われてならない。

④利害関係

「利害」という概念はマルクス主義者の中では「階級利害」の強調という形で第二インター系統の理論家達に好んで用いられているが、マルクス自身の理論においては大した意味をもっている訳ではない、とヘラーは述べる。「個人的行動の動機としての利害は、貧欲という欲望に還元されるところの一つの表現以外のなにものでもない。」(p. 58) 即ち、利害とは、マルクスによれば、「資本主義の物象的現実という枠組の中で解釈されるだけのもの」(p. 60) にすぎず「それ自身物象的性格をもっている」(同) 概念にすぎない。ヘラーによれば、利害概念はマルクス初期の著作(『経哲草稿』など)で見られるとしても、後期の著作では資本主義の根本的批判の概念にはならないとして放棄されている、という。むしろ「エンゲルスが(『反デューリング論』で)階級闘争を決定する要素の一つとして階級利害を指摘したのである。しかし、明確に言えば、エンゲルスにとっては後のマルクス主義的分析で一般に用いられるようになった(第二インター、殊にカウツキーから明白に使用

されている) 排他的で一点のくもりもないような用語の一つではなかったということに注意しておく必要がある」(p. 60) とする。マルクスとエンゲルス、その後のマルクス主義者と「利害」という点について区別していることはそれ自身興味深い問題といえる。階級闘争路線や、資本主義的人間観のズレなどいくつかの論点を指摘しうがここでは触れない。しかし、マルクス主義の俗流化が多くの場合、『反デューリング論』に根ざす場合が多いが故に、ヘラーのこの指摘に首肯せざるをえないのである。

以上のように、ヘラーは資本主義的欲望の疎外についていくつかの例示しているが、その基本的命題は既に三のAで見えておいたところにある。ヘラーの欲望論はその特徴を主体性論(人間論)にしている。そのせいか、物的なもの、精神的観念的なものとの区別と連関が必ずしも明確ではない。その難点の根拠については既に検討したので繰り返すこともあるまい。

4

本章では社会的欲望を取扱う。この社会的欲望についてマルクスは様々な解釈や定義づけを与えている。ヘラーはマルクスのこの概念がマルクス理論の中でもっとも不明瞭な概念の一つであるとしている。しかし、ヘラーはマルクスの社会的欲望がその主要な傾向として、資本主義社会の物象化された欲望を扱っているように思われるとし、そのような資本主義的に物象化された社会的欲望概念の分析から、それらを止揚したところの新たな欲望を掴み取るべきだと主張する。

ヘラーによれば、社会的欲望とは一般的にいうと個人の欲望よりもより高いレベルのより普遍的といったよいが、実際には、資本主義では社会的欲望とは被支配階級に対する支配階級の特権的・支配的な欲望が普遍的な根拠をもつように仮装されてあらわれるものにすぎない、と述べる。

「全体的行為の動機として現われる共同的利害は、たしかにどちらのがわからず事実として認められてはいないが、それはそのようなものとしては動機ではなく、いわばそれ自身に反射した特殊利害において、すなわち他方の個別の利害と対立する個別利害の背後において生じているものなのである。……一般的利害とは利己の利害の一般性にほかならない」(『要綱』II 164 頁) とマルクスが利害について述べているのと同じことが、社会

的欲望と支配階級の個別的欲望との関係についてもあてはまる、とヘラーは述べる。したがって、資本主義的に物象化された個別的=社会的欲望とは資本家の「資本価値評価の欲望」を指すことになる。

このように、社会的欲望とはマルクスにあっては個人的欲望の特有な形で展開したものにほかならないが、マルクスが社会的欲望を様々に解釈するときでもこうした点が同様にあらわれうる。マルクスが社会的欲望を「社会的に生み出された欲望」という意味で用いている場合、その内容はいろいろ含められうるとしても、それらはいずれにせよ個別的欲望である、とヘラーは述べる。又、「社会化された人間の欲望」という意味で用いられている場合も、それは個人の欲望でしかない。このように「マルクスは個人的人間の欲望以外の欲望は認めない」(p. 69)とヘラーは述べる。しかし、マルクスの第三の用語法として「社会乃至階級における物的財に対する平均欲望を述べるときに使用される」(p. 70) 場合は事情が異なる。マルクスはそのような場合、わざわざ「引用符」をつけ、その場合には「有効需要の形で欲望の表現」(同)として社会的欲望の概念を使用している、というのがヘラーの基本的見解である。それとは逆に「引用符のない場合、それは有効需要に表現を見い出せない欲望(物的財に関する)を意味している。マルクスにとって、こうした区別は労働者階級との関係において関心のあることであった、というのは、彼が支配階級については物的欲望と有効需要は少なくとも重なり合うものとして考えていたからである」(p. 70) とつけ加える。つまり、支配階級にとっては、彼等が実際に必要な欲望よりも、彼等の有効需要の方が大きいのであるが、労働者階級には逆のことが生じている。つまり、労働者階級は実際の社会的欲望を充足する有効需要を形成しえていない、とヘラーは述べる。「労働者階級にとって、食い違いは有効需要の形態で表われる〈社会的欲望〉と、いわゆる〈現実の〉社会的欲望との間に生じる、後者は単に量的に前者を凌駕するのみならず、質的にも種々の具体的欲望を含んでいる」(p. 70) とこの両者の「食い違い」を述べる。ヘラーのこの主張を補強するため引用されている『資本論』の箇所は次の通りである。「〈社会的欲望〉、すなわち需要の原則を規制するのは、根本的にはいろいろな階級の相互間の関係によって、またそれぞれの階級の経済的狀態に従属する」(『資』⑥ 301 頁)「こうして、需要

の側にある大きさの一定の社会的欲望があって、それをみだすためにある物品の一定量が市場にあるということが必要であるように見える。しかし、この欲望の量的な規定はまったく弾力性のある変動しやすいものである。この欲望の固定性は外観である。もし生活手段がより安くなるか、貨幣賃銀がより高くなるかすれば、労働者たちはより多くの生活手段を買うであろう。そしてより大きな〈社会的欲望〉が現われるであろう。……諸商品にたいする市場で代表される欲望—需要—が現実の社会的な欲望と量的に相異なる限界は、もちろん商品が違えば非常に違っている」(『資』⑥ 312 ~ 3 頁)。このような引用のあと、ヘラーは「ここでは〈社会的欲望〉は需要に関連し、それゆえ、労働者階級の〈現実の〉社会的欲望を表現しない単なる〈外観〉であり、それらを自己の対立物として区別している」(p. 71) というのである。しかし、ヘラーがあげている有効需要としての〈社会的欲望〉と〈現実の〉社会的欲望の「食い違い」はただちにになにか労働者階級の真実の欲望と、疎外された欲望という形で理解されるものではない。この『資本論』に拠る限り、そうはいえない。マルクスもいうように、一般商品については、「……与えられたどの場合にも需要と供給とはけっして一致しないとしても、それらの不一致は次々に続いて起きるのだから—そして一方へのかたよりの結果が反対の方向への別のかたよりを呼び起こすのだから—、大なり小なりの一期間の全体を見れば、供給と需要とは絶えず一致するのである。といっても、ただ過ぎ去った運動の平均としてののみ、そしてただそれらの矛盾の不断の運動としてののみ、一致するのであるか」(『資』⑥ 314 ~ 5 頁)。価値論は、この需給の一致を前提にして展開され、この均衡化への成約の機構は市場価値論として明らかにされねばならない。マルクスの文意も、この市場価値論における社会的需要と、価値論次元でのそれとの「食い違い」として基本的には理解されねばならない。商品経済においては需要は貨幣による有効需要でしかない。商品所有者の使用価値に対する欲望はこの貨幣による購買による充足しかない。しかし、この欲望=需要も商品価格によっては種々変動しうるものである。逆に供給の側も価格によっては供給を変化させねばならない。つまり、種々変動する需要供給は価格の騰落現象として現われ、この価格変動の中に価値規定が貫徹していく。この価値規定に際して、社会的需要は後景に退けられ、資本蓄積水

準に対応した必要労働と剰余労働によってその限界の画されたものとして理解しうる。この点生産価格論でもそうである。しかし、需給変動は直接には個別商品に対する社会的需要の発動としてあらわれるのであり、社会的需要に対する供給いかんで、又価格も変動し、したがって価値規定も異なりうる。市場価値機構における社会的需要は、価値論次元のそれと異なっており、商品の個別使用価値への社会的需要を取扱うのであり、その個々の要素は資本家、労働者の需要を問わない。ここに「食い違い」が生じる。と同時に社会的需要の異相、限度が明らかとなり、一社会における社会的需要が根本的に生産力によって規制されている側面を明らかにしうる。ヘラーの場合こうした点は一向に定かではない。ヘラーによれば、この〈社会的欲望〉（ヘラーのいうところでは引用符つき）は「必然的欲望の経験的社会学的内容と一致する。しかしながら強調される必要のあることはこれが一つの平均であるということである。より明確に言えば、それは個人的欲望の平均である、ということになる（歴史的に発展し、慣習によって伝承された、道徳的側面をも含んでいる）」(p. 71)とされているのであり、これは価値論次元での社会的欲望に妥当する。しかし、これに対してヘラーは、欲望がその社会において一定の歴史的制約をもつとしても、結局のところ「個人の欲望は彼が自分の欲望であると知り、感じるものであり、彼はそれ以外の欲望をもたない」(p. 71)として、労働者は資本主義の有効需要としての〈社会的欲望〉と〈現実の〉社会的欲望（実は労働者の個人的欲望）とのギャップ＝疎外を認識する、というのである。こうした見解が誤まっていることはいうまでもない。勿論、マルクスにおいてもこの点は明確ではなかったのである⁽¹⁸⁾。

たしかにヘラーの述べる通り労働者階級の社会的欲望は労働力の価値規定を通して、一般的には歴史的時代には平均的な社会的欲望として確定されている。しかし、それは景気循環を通して、資本の蓄積によって根本的に規定された一定の生活水準とせねばならないのであって、ヘラーのように労働力の価値規定に含まれた「習慣、道徳」など客体的に規定されえないものを直接排除するものではない。それらも、歴史的に、したがって根本的には資本蓄積水準によって、生活資料の質と量が決められるように、決定されねばならない。労働者は資本の生産過程で生産された生産物を、労働力を売って得た代価＝労賃で再び買い戻すの

であり、この労賃水準の騰落いかんでは労働者が買い戻す生活資料の質、量は種々変化することになる。一般に好況期には生活水準は上り、不況期には切り詰められ、景気循環を通して一定の水準に落ち着くことになる。勿論、この労賃によって如何なる生活資料を購入するかは労働者の個人的嗜好によって種々異なるものとしてよいのであるが、それがそうなりうるのは資本の機動的生産性を背後にもった市場価値機構に媒介されてそうなりうるのである。この生活水準の決定と密接な関係をもつのが労働時間の長短、労働の強度等の労働条件の問題（自由時間の長短と表裏の関係にある）であり、これも基本的には資本蓄積を通じた景気循環過程で具体的に確定されてくる。一般に資本の蓄積が進行するにつれ、労働条件も生活水準も向上していくものとしてよいのであり、絶対的窮乏化は論証しえない。これらを基礎にしてマルクスのいう労働力の価値に含められて規定されていた「習慣や道徳」など精神的生活の異相も解明されうることになろう。勿論、これらを直接労働力価値規定に含められることは出来ない。基本的には労働時間の短縮、労働条件の良化に伴ない自由時間が増加することによってそれら精神的生活の余地が増加することによって、それら精神的活動の余地が拡大するものとしてよいであろう。これはしかし一義的に決めえない。物的条件を整えるということ以外にない。したがってマルクスの労働力の価値規定はたしかにヘラーのいうように物質的、非物質的な問題が混在しており、これを客観的に解明しえないとする批判は正しいとしても、資本主義的蓄積を前提にして始めて、労働者の欲望を完全に規定しうるのである。それは又、完全に物的なものに限定することに一面化して把えることではない。このことは更に、思想的、哲学的に解明されなければならない領域を提示するとしても、経済学的にはこれぐらいは言いうるのである。したがってヘラーのように労働者の絶対的窮乏化のような事態を前提にして労働者の物象化をもって生活最低必要限度にしか労働者の欲望が存在しえない、とするのは一面的把握でしかないのである。

5

ヘラーは第四、第五章でそれぞれ「ラディカルな欲望」と「諸欲望の体系」と連合生産者社会」というものを考察している。これらは本書の中心的部分をなしていると考えられる。その内容を簡単にいえば、第四章では社会構成体としての資本主義の経済法則が客観的な自然法則の形をとって明らかにされたとしても、その法則は革命の必然性を明らかにするものではないと述べてマルクス主義の通説に固有ともいうべき、いわゆる自動崩壊論を否定し(p.81 参照)、経済法則は革命主体の「Sollen (当為)」の根拠を資本主義が必然的に生み出すラディカルな欲望にあるということを明らかにするだけであるとヘラーは主張する。そして、そのラディカルな欲望とは一つに労働時間の短縮闘争から生じる「自由時間への欲望」であり、さらには分業によって偏狭化された人間能力の普遍化への欲望である、とヘラーは述べる。その上で第五章で資本主義が必然的に生み出しながらも、資本主義では解決できないこうしたラディカルな欲望を実際に解決するものとされる「連合生産者社会」を考察するのである。この社会の基本的特徴は資本主義における疎外された労働に代わって、労働が「生き生きとした欲望」になる、ということにある。と同時に、他方で自由時間の欲望が解決される、ということにある。この問題はいいかえれば「必然の領域」と「自由の領域」を労働概念を中心にしていかに理解するか、という問題といってよい。

ヘラーによれば労働が生き生きとした欲望となるという点について、マルクスの『経済学批判要綱』と『資本論』では異なった理解があるという。つまり『経済学批判要綱』では「労働はもはや生産過程に包摂されたものとしては現れないで、むしろ人間が生産過程それ自体の監視人や規制者としてより関係するようになる。……もはや労働者は客体として自己との中間項として変容された自然物をそう入しないで、むしろ彼が産業過程に転型された自然の過程を、彼自身と彼が支配している非有機的自然の間の媒介としてそう入する。労働者は生産過程の主作用因としてではなく、生産過程と並んで立つ。この転型においてその主作用因は人間自身が遂行する直接的人間労働でもなく、彼が労働する時間でもなく、彼自身の一般的生産力の領有、彼の自然に対する理解と、社会体

としての彼の定在に依る自然の支配である。一言すれば、それは生産と富の巨大な礎石として表われる社会的個人の発展である。……直接的形態での労働が富の巨大な源泉であることをやめるやいなや労働時間は尺度であることをやめる、又やめねばならぬ。それゆえまた交換価値は使用価値の尺度であることをやめなければならない」(『要綱』IV 653～4 頁)と述べられている。ヘラーはこれをもって、「連合生産者社会」における固定資本の役割の増大、労働の「科学的労働」化＝管理・知識労働化。即ち「労働一般」化と理解する。その意味では『経済学批判要綱』のマルクスは労働生産過程の完全自動化を想定し、それによって労働の意義が変化したものと考えているとヘラーは述べる。このことは労働過程に伴う技術的分業の高度化を意味するとともに、それにとまって資格、技能の複雑高度化を必然とする。このような高度の労働は人間にとってやりがいのあるそれこそ「生き生きとした欲望」になるものとマルクスには考えられたのであろう、とする。だが『資本論』での解法はこれとは異なっている。『資本論』では全ゆる労働の単純化と、作業としての労働、つまり実際に肉体を行使する「手でする仕事」が残るものとし、全ゆる人々が社会的義務として、このような労働を遂行せねばならないものとし、労働が全て「科学的・管理的労働」になるとはされていないとヘラーは述べる。この労働の単純化は全ゆる作業の平易化、したがって、全ゆる作業への全ゆる人の精通、参加を保証することになり、『経済学批判要綱』の労働の複雑化とは正反対の見解である、とヘラーは述べる。

この点を解決するためにヘラーは『ゴーター綱領批判』にいう共産主義の第一段階、第二段階に『資本論』(ヘラーによれば『剰余価値学説史』も同様の立場であるとされている)、『経済学批判要綱』の見解をそれぞれあてはめる。したがって、共産主義の第一段階では交換価値という形では表われなくなった価値が「一般社会的カテゴリー」としての性格を顕わにし、「価値法則は一般的経済法則であり、その法則は……適切な表現を〈連合生産者社会〉においてのみ見出しうる」(p.109)とする。つまり価値の存在は当然労働に応じた分配を意味することになり、それゆえ、人々は生きるために労働を社会的義務とせざるをえない、同時に、労働もそれ自体「単純で不熟練の機械的労働」(p.110)であるから、労働が「生き生きとした欲望」でありえないことはこの第一段階では自

明のこととするのである。

この第一段階を経て、『経済学批判要綱』に述べられているような状況に転化する、とヘラーは述べる。それ故、『資本論』で述べられているような、労働を *toil and trouble* として捉え、それを社会的義務とする場合、当然、自由時間への欲望が必要労働時間の減少との対抗関係のうちに表われざるをえないが、ヘラーによれば、こういう対抗関係は人類の本史にとっては当然のことながら、過渡的なものとしてあらわれる。「私は労働の活動性と自由時間の活動性との間にそのような大きな深淵があるべきだとは考えないと信じている」(p. 119) からである。ヘラーによれば、労働は本来、人間の享楽であるべきだとするのであり、そのことが『経済学批判要綱』の労働論への高い評価となつてあらわれているのである。しかし既にこのような労働把握に対する我々の疑問は述べたのであるが、以上のようなヘラーの資本主義社会の必然的に生み出す「ラディカルな欲望」や「連合生産社会」論の主張の根底にある労働論について締めくくりに述べてみようとする。

本来、人間にとって労働は動物とは異なる本質的特徴をなすものであるとしても、人間の物質的生活のための手段でしかない。そこに自由時間の意義が浮かび上ってくる。人間と自然の物質代謝の過程＝労働生産過程は、人間として最低限必要な、全ゆる社会成立の根拠であるとしても、それ自体目的たりえない必要不可欠の事柄でしかない。資本主義はこの過程を商品形態をもって行なうのであり、利潤率と利子率を目標として経済過程が自立化した、したがって経済過程がそれ自体目的となった転倒の社会である。それゆえ、そこでは商品形態に包摂されて労働そのものが目的であるかのような外観を伴うことになる。「自己の労働にもとづく所有」といわれるように労働は即所有と結びつけられるのである⁽¹⁹⁾。しかし、人間と自然との全ゆる社会に共通な物質代謝過程において労働は能動的な働きを示すものと考えてよいが直ちにそれを本質として、自己目的として規定できるのであるか。それは労働が即所有とされる小市民的表象の表明なのではないか。この「自己の労働にもとづく所有」が誤りなのは土地に代表される自然という労働対象と、本源的には労働対象から獲得された労働手段に対する人間社会の関係を全く捨象したところで議論しているところであろう。とくに土地に対する人間社会の関わり方を抜きにして、「自己の労働にもとづく所有」な

ど語りえないことは自明であろう。勿論、問題は人間にとって一般に労働とはなにか、という根底的なところにある。この問題と以上述べたことは決して無関係ではないが、この根底的な問題について我々は一応次のように答えておこう。

自然的紐帯に基づく自然共同体を中心にした諸社会や、商品という物的形態を基礎にした資本主義社会が共通に人類の前史⁽²⁰⁾とされる所以は全ゆる社会に共通な人間と自然との物質代謝の過程を諸個人の人格(政治的・宗教的・身分的等のイデオロギーの諸形態にもとづく)や商品という物的形態に依存して行なってきたというところにある。これらに共通していえることはこの経済過程を多かれ少かれ自己目的とせざるをえないところにある。つまり経済問題への束縛こそが全ゆる社会問題の根拠であったといえるのである⁽²¹⁾。このように経済過程が多かれ少なかれ人間生活の中心的・自己目的過程たらざるをえないところに人類の前史の意味があると考えられる。

我々は労働についておおよそ以上のように考えているが、それを基礎にすればヘラーがマルクスにおける二つの労働把握(『経済学批判要綱』と『資本論』の把握の相異)についても次のようにいえる。労働の単純化と科学的な管理労働化はヘラーのいうように二律背反的なものではありえない。労働の単純化は機械による作業の代替を可能とすると同時にその作業機械を扱う労働の増加を意味するからである。しかし、このことはそもそも人間が手の延長として道具を使用し、労働対象に働きかけた太古の時代と労働把握に関してはなんら変化はない。ただ手でやる仕事が機械によって代替され、その労働手段を制御することが人間の「手でやる仕事」に替っただけのことである。そのことは労働対象、労働手段を労働主体が科学的に把握していることを意味し、その意味で経済過程を人格や物に依存せず科学的に処理してよいことを意味する。経済過程を合理化し、「最小の費用で最大の効果をあげる」という経済原則を科学的に実現する⁽²²⁾。こうした経済過程の科学的合理的処理の実現は決してこの過程が本来の人間の目的であるということを証明しない。逆である。このような意味ではじめてヘラーのいう「自由時間への欲望」が意識的に追求されることになる。「人間と社会の真の富は労働時間からではなく、自由時間からなる」(p. 104) というのも、物的生産過程の合理的処理の基礎なくしては実現しないのである。資本主義は資本の無政府的運動の下に結果的には

このようなことを実現してきたのであって、そうした社会的原則を特有な機構で処理しうが故に歴史的一社会たりえている。したがってヘラーのいう「ラディカルな欲望」も資本主義の再生産を前提にして処理しうるものとして、未来社会への変革の発条たりえない。

以上、我々は労働時間と自由時間に結局のところ収斂せざるをえなかったヘラーの欲望論を紹介しつつ検討してきたのであるが、ヘラーもそうしているように一般的に欲望を規定することは空虚な常識論にとどまるしかない。根本は人間の欲望が発揮される消費生活を資本主義が形態的に如何にして処理しているかと、即ち逆にいえば欲望を社会的欲望として資本主義社会の実現機構を分析することから始める以外にその解決の道はない、ということ、これである。ヘラーはマルクスの欲望概念の検討をはじめとして、いくつかの興味ある論点を呈示したのであり、その点は高く評価されるべきだとしても、結局のところ、労働力商品化を基礎とする資本主義の特殊な形態機構の上で発現する諸現象を疎外、物象化として事実的に指摘するにとどまったのである。我々は疎外論を超えた地平において、更に社会的欲望概念の検討を資本主義的生産様式の基礎において解明すべきであると主張しうるし、又、その基本的論点については本稿でも触れたし、別の個所でも主張してきた⁽²³⁾。しかし、社会的欲望に関わる論点は以上にとどまるわけではないが、それは本稿での課題の範囲を超える。他日を期したい。

注

- (1) K. Marx. "Grundrisse der Kritik der Politischen ökonomie" Diez Verlag Berlin 1953. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』(大月書店)「序説、2」参照。以下、『要綱』と略記し、巻数と頁数のみを記す。なお、本稿でも多用する『経済学哲学草稿』、『資本論』についても、前者は『経哲草稿』、後者は『資』と略記し、それぞれ岩波文庫版、国民文庫版を用いる。『資本論』では巻数、頁を①2頁というように略記する。
- (2) Agnes Heller, "The theory of Need in Marx" London, 1976 (original title, "Bedeutung und Funktion des Begriffs Bedürfniss im Denken von Karl Marx".) 以上、本書からの引用は頁数のみを記す。
- (3) ヘラーは1950年代にルカーチの弟子であり、助手であった。1929年ブタペスト生れである。(表紙ジャケット参照)なお、良知他訳『個人と共同体』(法政大出版局)後書のヘラーの紹介を参照されたい。
- (4) 本書は独語版からの英訳書であり、英訳本で用いられているマルクスの英訳書は我々の手に入らなかったものもある。そこで本稿では出来る限り、大月書店刊の邦訳『マルクスエンゲルス全集』から引用することに努めた。その際、『全集』と略記し、巻数頁を記すにとどめた。
- (5) 英訳書では valorisation of capital. 原語では Bewertung des Kapitals となっている。これは価値増殖とは違う。資本の価値維持ということなのであるか。本書では多用されているが一応「資本の評価」と訳しておいた。
- (6) ヘーゲル『法哲学』では古典派経済学を継承して、市民社会は「欲望の体系」と理解されているのは周知のことである。この点の分析については、Riedel "Studien zu Hegels Rechtsphilosophie" 1969 (山本他訳『ヘーゲル法哲学』福村出版 1976) 参照。
- (7) この点についてヘラーが引用している『経済学哲学草稿』の当該箇所は前後の文も含めれば以下の通りである。「①国民経済学者は、労働者の欲望を肉体的生存のぎりぎり必要で最低の維持にまで制限し、しかも労働者の活動をもっても抽象的な機械的運動にまで還元することによって証明する。したがって彼はこういう、人間はこれ以外にはなんらの活動する欲望も、なんらの享楽する欲望も持たないのだ、と。なぜなら、こうした生活もまた、人間的な生活であり、あり方であると彼は言明するからである。②国民経済学者はぎりぎり貧窮した生活(生存)を標準として、しかも一般的な標準として算出することによって証明する。大多数の人間に妥当するから、一般的だ、というのである。彼は労働者の活動をすべての活動からの純粋な抽象物にしてしまうのと同時に、労働者を無感覚で欲望をもたない存在にしてしまうのである。だから彼には、労働者のどんな贅沢も排斥すべきものにみえるし、またもっとも抽象的な欲望をこえるすべてのもの—それが受動的な享楽としてであろうと、活動的な発現としてであろうと—は、彼には贅沢にみえるのである」(『経哲草稿』153頁)
- (8) 使用価値に対する直接的欲望と有効需要としての欲望とのもっとも単純な関係は価値形態論で明らかにされる。宇野弘蔵編『資本論研究』I (筑摩書房、1967年)、永谷清『資本主義の基礎形態』(お茶の水書房、1970年)を参照のこと。

(9)拙稿「市場価値論」(降旗節雄編『宇野理論の現段階。』

I 経済学原理論」社会評論社, 1979 年) 参照。

(10)『資本論』の「自然的欲望」に対応させて、ヘラーが引用している『経済学批判要綱』の「自然的欲望」の規定は次のとおりである。「奢侈は自然的必要物にたいする対立物である。自然の欲望は自身一個の自然主体に還元された個人の欲望である。産業の発展がこうした自然必要性を止揚することは、かの奢侈を止揚するのと同様であるが—もちろんブルジョア社会ではこの止揚はただ対抗的なものであるにすぎない。というのはブルジョア社会それ自体が、ふたたび一定の社会的な基準を必要な基準として奢侈に對置するからである。」(『要綱』III 464 頁)

(11)ヘラーは労働力の価値規定と関連する「必然的欲望」規定にマルクスの「歴史的、道徳的、精神的要素」を混入させている、と批判している。この批判はそれ自身として正しい。しかし、物的生産にのみ関わらせて労働力の価値を必要最低限の生存限界とする訳にはいかない。資本蓄積水準に規定された「歴史的なもの」の入りうる余地を残さなければならない。この点後にふれる。

(12)「必然的欲望」も「必要的欲望」も英訳本ではともに necessary need であるが、形式的に「必然」と「必要」とに訳し分けた。内容的には異ならないようである。マルクスの真意もそのようである。

(13)エンゲルスは次のように述べている。「自然においては、一自然にたいする人間の反作用を度外視するかぎり、一まったく意識のない盲目的な諸力がたがいに作用しあうのであって、一般的法則はその交互作用のなかではたらいっているのである。すべてここで起きることのうち、一表面に現われてくる無数の外見上の偶然事のうちでも、またこうした偶然事の内部にある合法則性を確認す究極の諸成果のうちでも一意欲され意識された目的として起こるものはな

い。これに反して、社会の歴史の場合には、行為している人々は、すべて意識をもち思慮や熱情をもって行動し一定の目的をめざして努力している人間である。意識的な意図なしには、意欲された目標なしには、なにごともし起こらないのである。」(『全集』② 301 頁)と。ヘラーの欲望概念はこのエンゲルスの見解とほぼ同一である。

(14)ヘラーは今述べた欲望と区別して要求(desire)というものを提起している。それは「具体的〈対象〉に向けられた」(p. 42)ものである、とされる。しかし又、欲望と要求は「一つの複合した現象」でもある、とされている。意欲されたものと、その結果の産物という形であらわれるからである、という。

(15)スミスの「労働＝本源的購買貨幣論」の意義と限界については拙稿「価値法則論」(降旗節雄編、前掲書に所収)参照。

(16)ヘラーの述べる資本主義的欲望疎外の具体的展開は、51～52 頁にわたされている。

(17)“Grundrisse” Penguin book p.224. 但し邦訳の該当箇所は見当らなかった。

(18)『宇野弘蔵著作集』4 巻所収「市場価値論について」を参照。

(19)「連合生産者社会」は先に本文でもみたように「単純商品生産者社会」と類似している。労働過程論把握の一面性によるものであることも指摘しておいた。

(20)『経済学批判』(『全集』⑬)の序言、参照。

(21)拙稿「株式資本論の理論的展開」(北大『経済学研究』26 巻 1 号, 1976 年) 参照。

(22)拙稿「特別剰余価値」(降旗節雄編前掲書所収) 参照。

(23)注の(9)参照。なお、近刊予定の拙稿「初期マルクス研究」(『経済学批判』第 8 号, 社会評論社)では疎外論の意義を確定しておいた。併せて参照されたい。

(昭和 54 年 11 月 22 日受理)